

イベント名	第 97 回例会「Learning by Doing」－ランゲージ・フェスティバルの実践		
実施委員会	企画委員会	開催場所	オンライン
開催日時	2024/7/27 20:00~21:30	参加人数	35 名
参加資格	会員・非会員	参加費	無料

イベント概要（案内文など）

ポスター等の案内文など

「多くの学生は、英語圏の国にしか興味が無い。だから、彼らは香港がどこにあるのかわからないし、興味が無い。彼らの心の中の地図にアジアの国は存在していないんです」－これは、ある香港出身の留学生の言葉です。これが「国際」大学を名乗る私たちの現実です。

この現実を変えることはできないかと考えた時、思い出されたのが発表者の留学体験です。当時、学業や英語力への不安からいつもびくびくしていた発表者が、現地のイベントで日本語のレッスンを行いました。そこで、参加者からの多くの質問、コーラスリーディングの大きな声、笑顔に握手にお礼の言葉をもらい、最後には、自分の持つものに価値を感じ、そこに堂々といていいのだと感じられたのです。

この体験を再現し、現実に関わりかけようとしているのが、「ランゲージ・フェスティバル (LF)」です。LF は、コミュニティの少数派学生から言語と文化を学ぶ、学生・教職員・市民参加の多文化フェスティバルです。2023 年 10 月に開催された LF3 では、ほかの 10 の言語レッスンとともに、伊藤雄馬先生が少数言語「ムラブリ」を直接法で紹介し、未知の言語との貴重な出会いの機会を提供してくださいました。

約半年をかけ、単位にもお金にもならない LF に取り組んだ学生スタッフたちの声を集めたところ、彼らの中に様々な「経験をとおしての学び (Learning by Doing)」(デューイ, 2004) が起こったように見えました。この会では、LF の実践や学生の声を紹介させていただいた後、参加者のみなさまのお知恵を借りながら、今後の LF を通じた学びの可能性について模索する機会が得られればと考えています。

(話題提供：衛藤智子、板橋民子、吉田真宏)

※本企画は、8/4 伊藤雄馬氏「「教える」も「育てる」もない森の民に言語教育とは何か伝えようとしてみたら大変だった話」とのコラボ企画として実施しました。

(担当委員：大平幸 古屋憲章 中山由佳 金桂英)

活動報告

話題提供者からの趣旨説明：

私たちは 2022 年から、①大学・地域コミュニティの多様性理解の向上、②多文化共生意識の醸成、③少数派留学生の活躍の場の創出とエンパワメント、を目標にコミュニティの少数派から彼らの言語や文化を学ぶ多文化フェスティバル「ランゲージ・フェスティバ

ル (LF)」を開催しています。この例会では、LF の実践や、スタッフや参加者の声、そこから得られていると推察できる学びを紹介することで、より多くの人を LF の輪に巻き込むこと、参加者の方と意見交換を行い、お互いに知見を深めることを目指しました。

当日の流れ：

1. LF の概要紹介

- LF 開催の背景、運営体制、主要活動とプログラム

2. スタッフ・参加者の声の紹介

- サーベイ・インタビューを通じて得られた学生スタッフ・講師の声、これらから推察できる彼らの学び
- 参加者の満足度アンケート結果

3. 質疑応答

4. グループディスカッション

参加者の興味に応じて、以下のテーマに分かれてディスカッションを行いました。

- a. 多文化フェスティバルを創る！（多文化フェスティバルの開催と運営について）
- b. LF のような場がマイノリティにとってどのような意義を持つのか？
混ざる（包摂社会）とは？
- c. 参加者・関係者にとっての LF での学びとは？

参加者から寄せられた意見・今後の課題

- LF の意義を感じ、自分たちでも開催してみたい。
- このようなイベントでは、どうしても講師個人＝国というような見せ方になってしまう。参加者に個人としての講師を知ってもらうアプローチが必要だろう。
- 「混ざる（包摂社会）」とは、社会の中で様々な違いを持つ人が存在することを放っておいてもらえる（許容される）状態ではないだろうか。そのためには、人々の違いについて社会が知り、彼らが恐れを抱く対象ではないと思えるようにすることが必要だ。
- LF の目標を達成するためにはイベントを継続していくことが大切であるが、次世代と価値観を共有しながら引き継ぎを行なっていく必要があるだろう。
- LF が参加学生に何をもたらしたのか、追跡調査をしたらどうか。
- 学内の他の多文化イベントでの学びと LF での学びの違いは何か。
- オンラインではなく、対面で行うことの意義を考えてみてはどうか。